皆のぶんまで
生きていこう

新藤兼人監督作品

一枚のハガキ

第23回
東京国際映画祭
審査員特別賞受賞

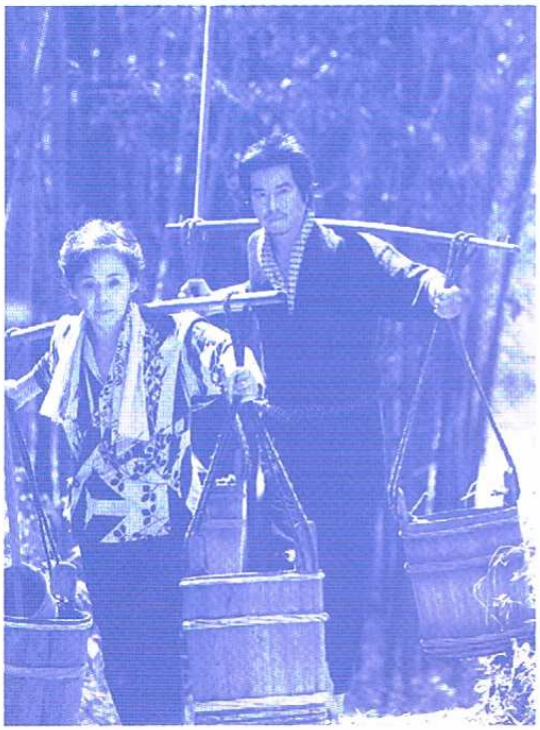
豊川悦司 大竹しのぶ
六平直政 柄本明 倍賞美津子 大杉漣 津川雅彦
川上麻衣子 絵沢萌子 大地泰仁 渡辺大 磨赤兒

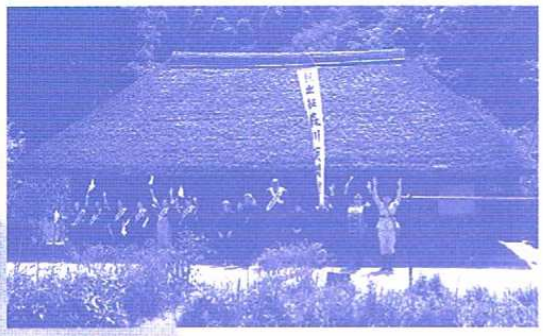
監督・脚本・原作：新藤兼人

製作：新藤次郎 渡辺利三 宮永大輔 プロデューサー：新藤次郎
制作プロダクション：近代映画協会
音楽：林光 撮影：林雅彦 編集：浅野行夫 照明：山下博 永田英則
美術：金勝浩 録音：尾崎聡 ラインプロデューサー：岩谷浩
助成：㈶文化芸術振興費補助金
配給：東京テアトル 宣伝：ピターズ・エンド
©2011「一枚のハガキ」近代映画協会／西遊舎／ブロンズ
www.ichimai-no-hagaki.jp

戦争がすべてを奪った。戦争が人生を狂わせた。それでも命がある限り、人は強く生きていく。

新藤兼人、映画人生最後にして最高の傑作





第23回
東京国際映画祭
審査員特別賞受賞

映画を愛するすべての人に、いまを生きるすべての人に、観てほしい。日本映画界の至宝、新藤兼人が99年の人生をかけた最後の最高傑作。

戦争末期に徴集された兵士100人のうち、94人が戦死し6人が生きて帰ってきた。その生死を分けたのは、上官が彼らの任務先を決める為にひいた“クジ”だった——。モスクワ、ベルリン、モントリオールなど海外の映画祭をはじめ、国内でも日本アカデミー賞、東京国際映画祭など国内外で数々の栄誉に輝く日本最高齢(99歳)の巨匠・新藤兼人。彼が自ら「映画人生最後の作品」と語る本作は、自身が生き残った兵士6人のうちの1人である新藤監督の実体験を元に作られた。人の命が“クジ”に左右され、兵士の死は残された家族のその後の人生をも破滅に導く。そんな戦争の愚かしさを、新藤兼人は体験者ならではの目線で、時に激しく、時に笑い飛ばすように描いてみせた。

戦争ですべてを失った男と女。彼らを巡り合わせたのは「一枚のハガキ」だった。

戦争末期。中年兵として徴集された男は、仲間の兵士から「今日はお祭りですが あなたがいらっしゃらないので 何の風情もありません。友子」と記された一枚のハガキを託される。終戦後、そのハガキの送り主である兵士の妻を訪ねると、そこには夫の亡き後、たて続けに家族を失い、古家屋とともに朽ち果てようとしていた女の姿があった——。反戦のメッセージとともにスクリーンから溢れるのは、すべてを失ってもなお、たくましく生き抜く人々の力の素晴らしさ。生命力溢れる美しいラストシーンに込められた「希望と再生」へのメッセージは観る者に大きな感動をもたらすだろう。また、豊川悦司、大竹しのぶら歴代の新藤作品に出演した豪華キャストが勢揃いし、新藤監督の最後の想いを届ける。

生きてゆかねばならぬ
生きぬきたい
兼人

5月28日(月) エポックなかはら

(川崎市総合福祉センター) 南武線武蔵中原駅前

上映開始 ①10:00～ ②2:00～ ③7:00～ ※各回30分前開場

入場料 前売 1,000円／当日 1,300円／小・中・高校生 800円

◆主催／「一枚のハガキ」を観る中原・幸の会　※上映時間：1時間54分

◆問い合わせ／松元☎090-1217-8952　高橋☎090-2565-9869　栄☎090-1776-6414